

一つの大きな世界を形作る脚本シリーズ——

斉藤俊雄作品集 3

晩成書房 刊 定価 11200円 + 税

『中学校演劇脚本集 ふるさと』 シリーズ・七つ森の子どもたち

田代卓

東京・日本演劇教育連盟常任委員

正直、『ふるさと』は傑作だと思う。私は、斉藤さんのオリジナル上演を関東大会と、全国中学校総合文化祭（栃木大会）との二回、見る機会があったが、二回とも最後の方になると涙がとまらなかった。年間で五十本以上の中学校演劇を観るが、これだけ心が揺さぶられる劇に出会えることは滅多に無いと言って良い。この脚本は、東日本大震災をきっかけに斉藤さんが、いつでもどこでも、机と椅子を並

べられれば上演できる劇”として、被災地の学校で上演できるように考えて書かれたものだ。それに関連して生まれた、被災地での奇跡のようないきさつは「あとがき」に丁寧に書かれているが、そのような様々なエピソードを生み出す力を持った作品だと思う。

さて、この脚本集には、この『ふるさと』をはじめとして、最新作の『ずっと

10

10月の本棚

▼『できる！つかえる！ことば遊びセレクシオン』向井吉人著 小学校教師として、長年にわたりことば遊びの教育実践と理論的研究を続けてきた著者による、実践的なハンドブック。「Iことばが見つかる（ひらがな遊び）」「II文が生まれる（漢字遊び）」「IIIイメージが広がる（創作技法）」は、すぐできることば遊びを具体的に紹介。「IV型はめ創作（ことば遊びの詩の授業）」では、谷川俊太郎作品などを取り上げた詩の授業の実践を紹介。「Vもつと楽しく（ことば遊びのカルタと本）」は、ことば遊びに関するブックガイド。実践に裏つけられた、楽しく活用しやすい一冊だ。（B5判 112ページ、1600円 + 税、太郎次郎社エディタス）

▼『国際コンテンポラリーダンス』原田広美著 「現代のダンス」を表す「コンテンポラリーダンス」の広がりを示す本書には、舞踊の歴史と現在がぎっしり詰まっている

そばに在るよ』まで、七作品が納められている。その中には彼の定評のある作品であり、太平洋戦争に絡んだ作品である『夏休み』と『青空』の「戦後七十年改訂バージョン」（『青空』は「私の青空」に改名）も納められている。この二つの作品はどちらも戦争から何年たっているかで登場人物の年齢その他、微妙な問題が出てくるので、これからこの作品を上演しようと思っている人は飛びついてでも欲しくなるに違いない。その他、『アトム』『Happy Birthday』『赤と青のレクイエム』が納められて、全七作品となっている。

この脚本集で、斉藤俊雄作品集は、1巻の『夏休み』、2巻の『七つ森』と、数えて3巻目になった。彼の作品の特徴の一つに、この3巻の作品が壮大な世界を形作っているということがある。まるでワグナーの楽劇『ニーベルングの指輪』四部作の音楽全体が互いに関連し合ったライトモチーフによって壮大な世界を形作っているように、この3巻に収められた劇の場所、登場人物、できごと

とは「七つ森」という森のある一つのまちの中のことであり、それぞれの作品に共通した背景が存在し、一つの壮大な世界を形作っている。そのことに対する評価は人それぞれだろうが、いずれにせよ、このような試みが日本の中学校で前代未聞のことなのは間違いない。

彼のように一人で中学校の演劇脚本集を三冊も発行した人は、それも一般書店で売られる本を出した人は今までにいなかった。かつては、日本演劇教育連盟脚本募集の特選を受賞した『降るような星空』をはじめ、単独公演用の長い作品を書いていたが、次第に一般の中学校演劇発表会で演じられる長さのものを書くようになり、毎年、数多くの中学校により上演されるようになった。

中学校で上演するための充実した脚本を書く作家は決して多くない。斉藤さんがそのフロントランナーを務めるようになってもうかなり長くなってきたが、さらに今後も、心に響く親しみやすい中学校演劇脚本を作り続けてくれることを期待したい。

る。副題は「新しい身体と舞踊」の歴史。二部構成の第1部は歴史編（バレエの誕生から、「コンテンポラリー・ダンス」の時代まで）として、クラシック・バレエ、モダン・ダンスの成立から今日までの舞踊の歴史を解説。第2部（欧州「コンテンポラリー・ダンス」への〈旅〉）では自らが取材した海外の国際フェスティバルでの舞台を詳細に報告。現代の舞踊創造、身体のとらえ方の多様な広がり进行分析する。（A5判四二〇ページ、四八〇〇円＋税 現代書館）

▼『学校教育と学習の心理学』秋田喜代美、坂元篤史著 授業や教育活動場面における学習心理学を初めて学ぶ人にとつて格好の一冊。入門書でありながら、最新の研究成果を現場に即した形で具体的に分かりやすく解いている。リヴオイシングやアプロリエーションなど学習心理学で使われる用語の解説書の役割も果たしている。（A6判二四六ページ、二七〇〇円＋税、岩波書店）

▼『映画女優 吉永小百合』大下英治著 古希を過ぎて、なお青春映画のヒロインさながらのみずみずしさを保つ女優吉永小百合。今も女優業のほか、映画のプロデューサーや原爆詩の朗読などの活動に精力的に取り組んでいる。その活力の源は何か。彼女が出演した映画作品を丁寧にたどりながら、その秘密に迫る。（四六判三四五ページ、一七〇〇円＋税、朝日新聞出版）